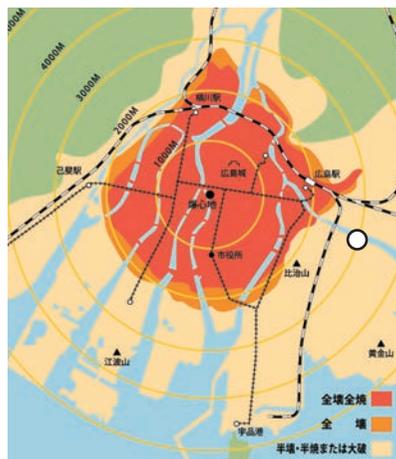


消えていった幼い姉妹…生きていてほしい

被爆体験証言者 新井 俊一郎

64回生 中須賀 愛美

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

黒々とそびえ立つ比治山の向こうから、被爆者たちが東大橋を渡って逃げてくる場面。手前の幼い少女2人はしっかりと手を握り合って逃げてきた。奥には被爆者たちを気遣う様子もなく、部外者を通すまいと立ちはだかる憲兵、さらに市へ入ろうとする記者らしき男性と乱闘する憲兵らがいる。

生徒のコメント

新井さんからは「2人の幼い少女が東大橋を渡って逃げてきている場面」を描くよう依頼されていましたが、より詳しくお話を伺っていくうちに、「憲兵らの話も入れたい」と思うようになり、このように複雑な構成になりました。新井さんが最も印象に残っているという2人の少女の顔はパンパンに膨れ上がっていたということで、それをどのように描くかということで一番悩みました。また、自分の想像に過ぎないとしても、こちらへ向かってくる「幽鬼のような」被爆者たちを描く度にやりきれなくなり辛かったです。新井さんは実際にこの恐ろしい光景を目の当たりにされました。しかしそれを辛さのあまり隠してしまうことなく、私たちに語ってくださいました。その決意に深く感謝します。また、改めて原爆がどれほど恐ろしく悲しいものであるかということを感じさせられました。

被爆体験証言者のコメント

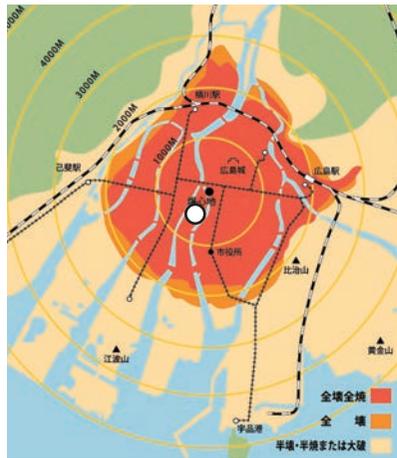
彼方の広島は炎々と燃え上がり、壊滅していることは明らかでした。市内に続く狭い「東大橋」の上は、逃れ来る瀕死の被爆者の群で埋め尽くされ、仁王立ちの憲兵が「誰一人として広島には入れぬぞ」と立ちはだかっていました。写真機を肩にした新聞記者らしい人は、乗ってきた自転車もろとも橋下の川に放り込まれ、中学生の私たちも彼らに遮られました。と、その時、焼けたただれ、皮膚を引きずりながら逃れ来る群衆の足元から幼い姉妹が現れ、スローモーションのように私の横を通り過ぎて行ったのです。風船そのままに顔が腫れ上がり、互いの手を握り合ったまま「しっかりねっ」という姉の声を残して被爆者の中に消えたのです。なんとか助かっていて欲しい、と、願い続ける思いの込められた絵が、私に代わって祈り、訴えてくれることでしょう。

皆、どこに消えたの？

被爆体験証言者 飯田 國彦

74回生 サンガー 梨里

令和2(2020)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

1945年8月6日午後、本通から見た原爆ドームです。炎や煙がもうもうと立ち上がる中、焼かれて亡くなったたくさんの人々の遺体が見当たりません。しかし、地面の瓦礫をよく見ると、所々に人骨が混ざっているのがわかります。8月6日午前8時15分に投下された原子爆弾は、一瞬にして全ての木造建物を破壊して燃やし尽くし、電柱をなぎ倒して黒炭とし、数万の人々をバラバラの白骨と炭の塊にして、瓦礫の下に埋め尽くすほどの力があったのです。

生徒のコメント

私ははじめて原爆の絵の制作に取り組みました。そこです感じたのは、自分がどれほど8月6日について知らなかったのかということです。広島に住んでいるため平和学習はありましたが、今回の作品制作と証言者の方との話を通して、表面上のことだけしか分かっていなかったということに気が付きました。また、強い思いを持って証言活動を続けている飯田さんの姿を見て、私も動き出さなければと感じました。

自分ではない人のイメージを形にするのは思いの外難しく、同じところを何度も何度も描き直すことも多くありました。ですが、他の人と共に一つの作品を作り上げることは、これからの制作活動に活かせる貴重な体験となりました。

被爆体験証言者のコメント

8月6日の午後です。爆心地から500mの本通付近から原爆ドームへの鳥瞰です。毎秒300~440mの爆風と3000~4000℃の高温で、全ての建物は破壊されて燃え尽き、人間を含む全生物はバラバラの白骨と炭の塊になり、その上が瓦礫と炭で覆われました。その後遺骨の収集が始まり慰霊碑に埋葬されましたが、全ての遺骨が収集されるはずもなく、現在の広島市の中心部は、収集し残した遺骨の上に建設された街である、といっても過言ではありません。

原爆孤児の私は、毎晩のように被爆場面を夢に見てPTSDに悩まされ、被爆から60年間、平和公園へ近寄ることすら出来ませんでした。

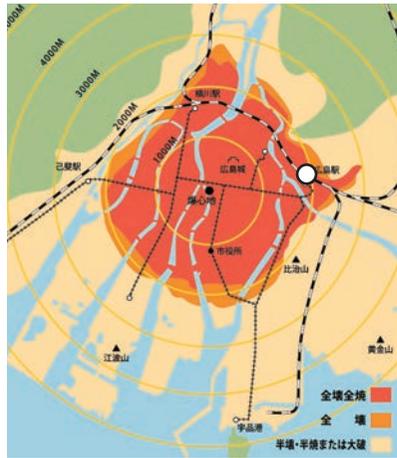
サンガー梨里さんに、「はだしのゲン」の中沢啓治さんが描けないと言われた、原爆の本当の悲惨な場面を描いていただきました。誠に無理な、酷な願いをしてしまい、申し訳ありませんでした。核兵器禁止が中々進まないのは、原爆の本当の悲惨さを知る人が少ないからだだと思います。この絵が少しでも核兵器禁止へのお役に立てますようお願いして止みません。

被爆後に立ち上がったところ (荒神橋から見た爆風によってなぎ倒された家々)

被爆体験証言者 李 鍾根

68回生 富田 真衣

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時機関車で働いていた李さん。勤め先に路面電車で向かう途中、原爆が投下された。異変を感じた李さんは、すぐにうつぶせになる。2～3秒後、立ち上がり周りを見てみると、原爆の爆風によって家々はつぶれ、見渡す限り視界を遮るものはなかった。

生徒のコメント

私が初めて李さんにお会いした時、とても明るい方だという印象を受けました。それだけに証言を聞いたときには衝撃的でした。爆心地から1.8 kmという近い距離で被爆されたそうです。それでもすぐに異変を感じ、うつぶせになるといったとっさの判断は、簡単にできることではないと思います。

先日、現役のアメリカ大統領が広島に来られました。その時の「謝るという問題ではない」という被爆者の言葉からは、71年前にここ広島で起きた出来事を肌で感じてほしい、という気持ちを感じられました。たくさんの人に伝わってほしいです。

被爆体験証言者のコメント

閃光・熱線、この時すでに衣服から出ていた皮膚は全て焼き尽くされ、立ち上がってみると全てが陰もなく見渡された。この絵があると子どもたちが、この状況をすぐに分かると思います。本当によく描けています。感謝です。

非常トラック(男性優先)

被爆体験証言者 池田 精子

61回生 立川 侑子

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後の広島市内。海田町の病院へ向かう途中のトラックに負傷者が乗せられている様子を描いた。戦場へ兵士として送られる男性が優先的に病院に運ばれ治療を受けたため、老人や女性、子どもさえもトラックに乗せてもらえず、トラックの周りに人が群がり、大騒ぎになったという。

生徒のコメント

戦争のために全てを捧げ、そのために多くのものを失った時代。その苦痛に耐え生き延びた人の話を聞くということは、少しためらいがあり、また責任が重いものだった。しかし、語り継ぐことが戦争廃止と平和維持のために私たちができる手段の一つである。

兵士として戦場に行ったという話を祖父から聞いたことがある。戦場で生死の境に立った祖父は、今でも当時のことが頭から離れないと言う。私は絵を通じて見てくれる人みなさんに戦争の恐ろしさをしっかりと理解してもらいたいと思う。

制作中、負傷した人とその人を運んでいる兵士の肌の様子に苦労した。原爆によって肌の表面がはがれて全身真っ赤になった人もいれば、黒くくすんだ赤い血の塊のできた人などを描き分けするのが難しかった。

被爆体験証言者のコメント

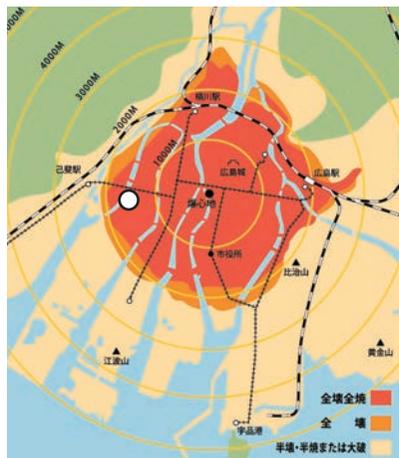
原爆を知らない立川さんが当時の話だけで描くのは大変難しいと思っていたが、出来上がった作品を見て、すばらしい出来だと思った。悲惨な情景が走馬灯のようによみがえり、二度と戦争があってはならない、人類の滅亡につながる核兵器を廃絶しなければいけないとの思いを強く感じた。立川さん、本当にすばらしい絵をありがとう。

私が見た被爆直後の被爆者(福島川河川敷)

被爆体験証言者 井口 健

67回生 伊東 良隆

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

井口さんは福島川の隣にある奉公先の工場の集会所で被爆し、その衝撃で気絶しました。集会所に火が回ってきて目を覚ました井口さんは窓から飛び出し、河川敷に着地しました。

その時、足に釘が刺さり、その釘を抜いて上を向いた瞬間に井口さんが見た光景を絵にしました。

生徒のコメント

中学生の時、基町高校の原爆の絵の特集番組を見て、この取り組みを知って興味を持ち始め、この度この絵を描かせていただきました。

燃える街も全身に火傷を負った人も想像することができず、とても苦労しましたが、井口さんのお話を聞き、資料館の資料を見て、やっと描くことができました。

この絵を描くことを通して、被爆者の方の苦しみを知りました。被爆の実情について、多くの人に知っていただくための情報発信の中心になっていきたいです。



炎から逃れ水を求めて雁木に集まってきた人々

被爆体験証言者 大田 金次

69回生 松田 優奈

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された日の午前9時頃の天満川。炎から逃れてきた人、怪我をし、助けを求め人、水を求める人、黒く焼け焦げて亡くなったたくさんの人達が雁木で足の踏み場もないほど横たわっている惨状。その中には赤ん坊を背負ったまま息絶えた母親の姿もあった。



生徒のコメント

黒こげの人、全身に怪我や火傷をしている人…。お話を聞いても当時の悲惨な光景は想像もできませんでした。聞いたことを一つひとつ考えて理解して絵におこしていくのに、自分の知識不足、技術不足を感じ、とても苦労しましたが、今までよりもっと「あの日」のことを深く知り、平和がどれほど大切なものか気づくきっかけになりました。この経験をこれからの制作にも何かしらの形で生かしていければ良いと思います。

被爆体験証言者のコメント

この度は松田さん、黒川さんに大変お世話になりました。お会いする度に私は思った事を言い、大変苦労されたと思います。しかしキャンバスを見せてもらう度に私のお願いしたことが絵になっており、安心してます。私の講話の時には皆さんの絵を修学旅行の生徒の皆さんに披露したいと思っています。今後のご活躍を祈っています。

父の遺骨を捧げ持っている少女

被爆体験証言者 大林 芳典

60回生 宮田 実来

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



描いた場面

女学生がとてもまじめな顔で、父の遺骨を差し出している場面を描いた。

生徒のコメント

少女のまじめな顔をどう描けばいいのか悩んだので、もしそれが自分だったら家族の遺骨を持ったときにどんな思いであったか、どのような表情をするだろうかと考えながら描いた。ただ無表情なだけだとまじめな顔とはいえないので、前をじっと見つめ、少しでも不安さを感じる顔とした。

被爆体験証言者のコメント

8月9日の朝、避難所の前で会った時、父の遺骨だと伝えられた。その時の緊張した面影、胸中に涙があふれるのをじっと耐えていたその悲しみを思って、答える言葉も知らずただ頷いたのみだった。

訊ねて来た祖父母と去って行ったが、その人の戦後は知るゆえもない。心の片隅に埋もれていた記憶だったが、今はこんなこともあったと語り残したい心境である。

8月6日の夜の火災～炎に追われる～

被爆体験証言者 岡田 恵美子

68回生 伊内 悠

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された日の夜に起こった火災。
家が燃え、逃げる途中に、瓦礫に足を取られた人や、
遺体につまずいた人、たくさんの人が襲ってくる炎に
呑まれたそうです。



生徒のコメント

証言者の岡田さんに被爆体験について何度もお話を聞いて質問をする度に、あの日、岡田さんが見た光景と私の想像している光景はおそらく全く違うのだろーうと思いました。真っ赤な夕焼けを見るとあの日の出来事を思い出して今でもつらいと、絵具をそのまま出したような赤だったとおっしゃっていたのが私の心に深く残りました。

岡田さんの記憶に少しでも近づけようとしてしましたが、どう描けば良いのか分からず途方に暮れることもありました。今でもまだ近づけることができていないかもしれませんが、少しでも岡田さんの証言の助けになってほしいです。

被爆体験証言者のコメント

原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。
私は感動し、感謝しております。ありがとうございました。

鬼の形相

被爆体験証言者 岡田 恵美子

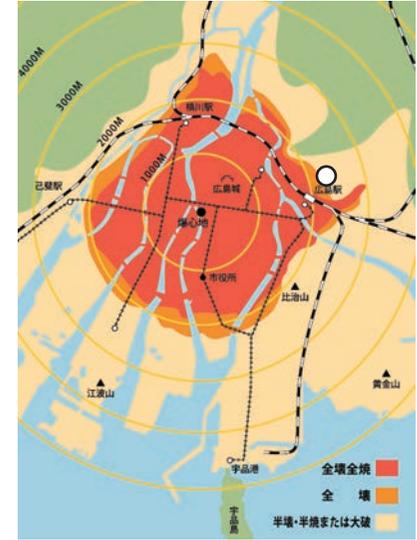
68回生 宇都宮 朱里

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

岡田さんが弟さんと避難する途中、東練兵場で焼け焦げた人々の間を縫って歩いた時、突然もんぺの裾を掴まれ「助けて」と言われた。



生徒のコメント

岡田さんからお話を伺った際、まず、70年も人の記憶に残るほど恐ろしい顔というのが分からず困惑しました。鬼の画像を見たり、ホラー映画を見たりして想像を巡らそうとしました。岡田さんは何度も、記憶に残ることが必要だとおっしゃられていて、私自身、それができてこそこの絵の真価、この絵を描くことの意味になると思いました。一人でも多くの人にこの絵を見て、あの日のことについて思っただけだと嬉しいです。見たことのない状況を聞いて描くことは、始めに思っていたよりもずっと難しく、貴重な体験となりました。

被爆体験証言者のコメント

原爆体験のない生徒さんが立派に作品にして下さった。私が感動し、感謝しております。ありがとうございました。

八月六日の記憶～燃える電車を見つめて～

被爆体験証言者 奥田 榮

60回生 濱田 奏衣

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

一瞬で兄と離れ離れになった。兄を助けることもできず当惑していると、一人の女性が瓦礫から這い出てきた。左肩から大量の出血をしていた女性は、右手で奥田さんの手を引いてくれた。逃げる途中で振り返ると、焼けた市内電車と舞い上がる煙、遠くには原爆ドームが佇んでいた。電車のそばには、逃げ出す力を失い倒れこんだと思われる幾人かの姿があった。



生徒のコメント

被爆者の言葉を形に表すのと同時に、ヒロシマを描くという特別な思いを抱きながら絵の制作に取り組んだ。資料探しもいつも以上に時間をかけた。思うように描くことができず筆が止まってしまった時は、友達の描く姿を見ては刺激を受け、何度も勇気をもらうことができた。いつまでも、どこにいても絵を描くことができる、そんな平和を守らなくてはいけないと改めて強く感じる事ができた。

被爆体験証言者のコメント

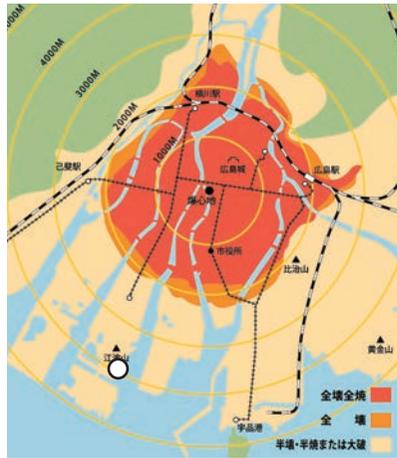
被爆当時の話を熱心にたびたび聞いてもらい、また質問してもらい感謝している。被爆時の様子が立派に描写されていて、とてもよい出来に仕上がっている。62年前の生き地獄を思い出し涙が出る。地球上では現在でも戦争が絶えない。1日も早く平和と核兵器の廃絶を願っている。濱田さん、ありがとう。

ヒロシマ～昇る魂～

被爆体験証言者 笠岡 貞江

61回生 立川 奈緒

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が投下された翌々日、被爆してケガで弱っていた父が亡くなり、その火葬を夜海の浜辺で行った。火が消えないように見張りをしていた笠岡さんは、火葬中の炎から青白い火の玉がいくつも立ち昇ってくるのを見たといい、その火の玉が人の魂だと思ったということである。

生徒のコメント

火や火の玉は実際にあるものだが、どちらも初めて描くものだったし、笠岡さんの気持ちをこめることに苦労した。戦争で亡くなった人々には、それぞれ伝えなかったこと、やりたかったことが沢山あったと思う。それらが無に帰してしまっただけで、笠岡さんの心に強く残ったのではないかな。私もこの絵の制作を通して、戦争について、原爆について考えた。この絵を見た人が、少しでも戦争について考え、笠岡さんの気持ちに触れることができればと思う。

被爆体験証言者のコメント

原爆は一瞬のうちに多くの生命を奪った。戦時中であっても、人は皆夢も希望も持っていた。私の父親は、屋外で被爆し、全身火傷で2日後に亡くなった。木切れを集め身内で火葬した。浜辺では同様に多くの死体が焼かれていた。12歳だった私も火が消えないように火の守りをしていたところ、日が暮れ薄暗くなると火の玉が飛んでいた。いくつもいくつも飛んでいたのが驚いたが、その場を離れられず見つめるだけだった。様々な思いを残して死んでいった人の魂だと思う。生きたい生きて色々なことをしたいと心に残して死んだ人たちの魂だと思う。何とか残しておきたいと思っても自分で絵にすることができず、今回お願いした。見たことのない場面を、私の言葉だけで絵を描くということで、何度も手を加え、難しく、苦労が多かったと思う。ありがとう。

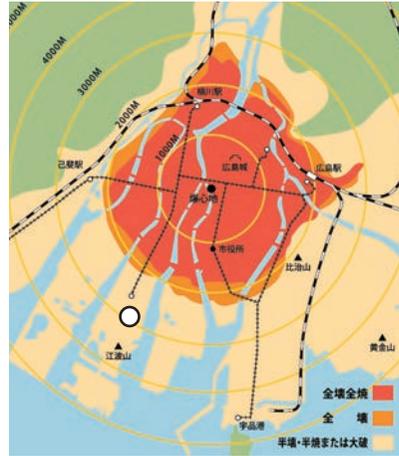


被爆当日、初めて見た被爆者

被爆体験証言者 笠岡 貞江

63回生 向田 紗希

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

当時江波町に住んでいた笠岡さんたちのもとへ、街中へ出かけていた近所の小父さんが、市内で起きた異変を知らせるために戻ってきたところ。小父さんは火傷で皮膚が変色していましたが、市内へ出かけている家族がいる近所の人たちのために、必死に江波まで戻って来た。

生徒のコメント

火傷を負いながらも江波まで戻ってきた小父さんの使命感、家族のいる市内に異変が起きたと知った近所の方々の驚き悲しむ様子を描くのが難しかったです。

実際に被爆した方だけでなく、そのご家族など、本当に多くの人々を苦しめる原爆は、あってはならないものだと感じました。

被爆体験証言者のコメント

綺麗な光を見た直後に、粉々になったガラスが頭に突き刺さり、傷を負いました。何が起ったのか分からず、近所のおばさん達と心配している中、30分くらい経った頃でしょうか、近くに住む男の人が出先の舟入(爆心地から2km地点)で爆弾にやられ、戻って来ました。その顔、腕はピンク色の火傷をしていました。「広島はおおごとじゃ、ピカッと光って全部やられた」と街中を指しながら話されました。

それを聞いてびっくりしました。市内の建物疎開に子どもを行かせている親たちは直ぐに探しに出かけました。市内に出かけている両親を心配しても、その時13歳の私はどうすることも出来ず、オロオロするばかりでした。

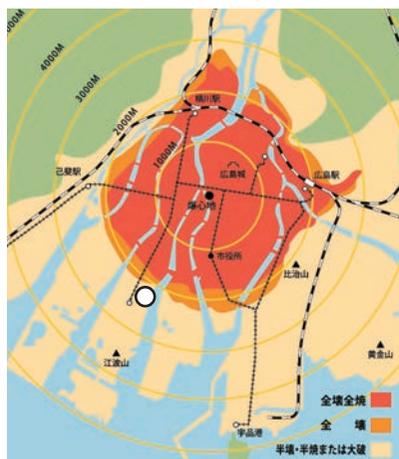


原爆投下後、初めて行った学校で

被爆体験証言者 笠岡 貞江

66回生 永井 攻

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆が落とされた数日後、笠岡さんが友人と共に死体を集めている最中に倒壊した学校の壁を見つけた。それを持ち上げると生焼けの死体が横たわっていた。

生徒のコメント

今回原爆の絵の制作に携わらせていただいて、改めて戦争の悲惨さを感じました。実際に見たことのないものを描き表すのはとても難しかったです。特に、赤黒く、異臭を放つ死体を表現するのが大変でした。この絵を見て、何か少しでも感じてもらえたら幸いです。

証言者の方の貴重なお話を聞くことができ、本当によい経験になりました。ありがとうございました。

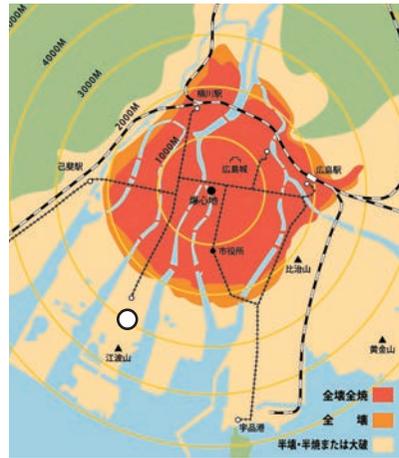


閃光

被爆体験証言者 笠岡 貞江

68回生 小川 美波

平成27(2015)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後。自宅屋内にいた笠岡さんが見た赤い光と、爆風によって割れ、飛び散る窓ガラス。

生徒のコメント

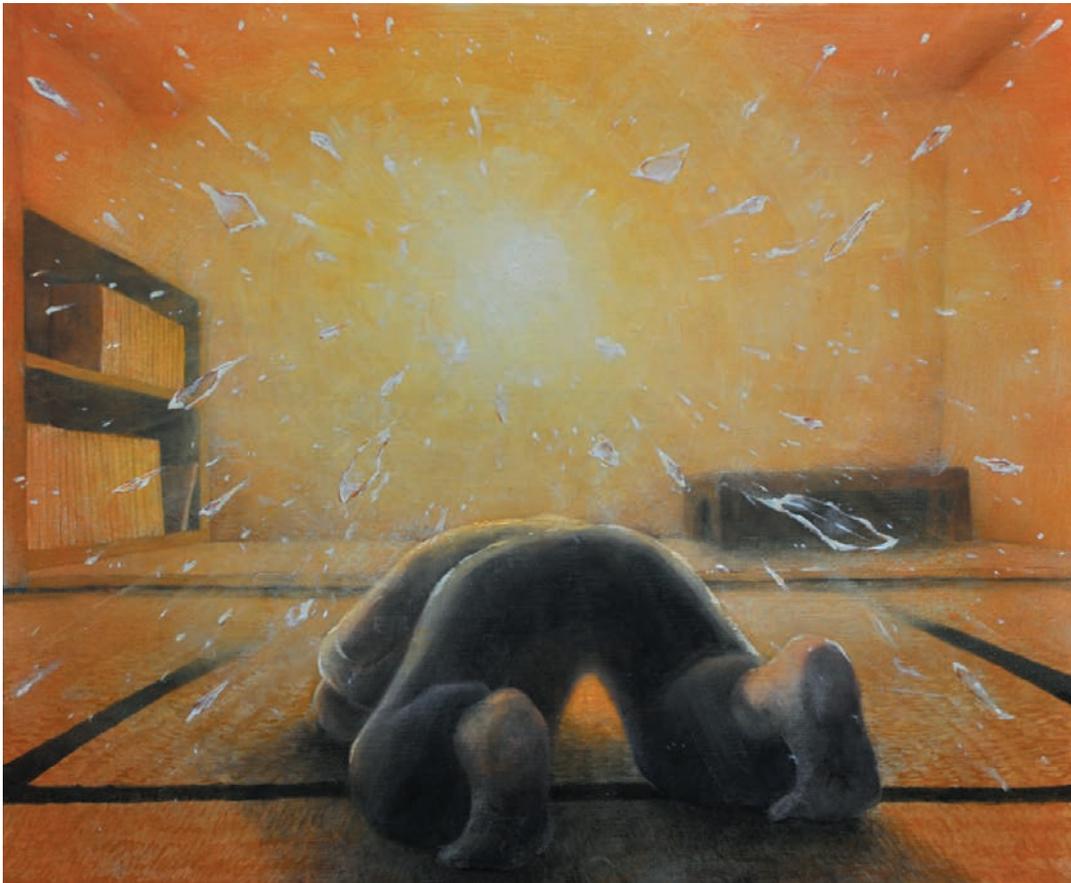
最も苦労したのは、この場面を笠岡さんご本人が目当たりしていないため、何をどのように、どこまで描けば良いのか、すべて自分で考えて描かなければならなかったことです。光の色だけ「日の出のような色」というアドバイスを頂いていましたが、ガラスの破片や陰影を描くのは、手探りの作業となりました。

お話を伺いながら、原爆の強烈さを強く感じました。鋭く差す光、爆音、爆風と、投下された直後の惨劇…。それら全てを一瞬のうちに多くの人びとの脳裏に焼き付けた原爆という凶器に、私は恐怖と憎悪の念を抱かずにはいられないのです。

被爆体験証言者のコメント

光った瞬間に爆発音・爆風によって粉々になったガラスの破片が飛んで来た事、言葉で言い表すのも難しいのに絵に画いてもらえて嬉しいです。どのように出来るのかワクワクしていました。

画くのにご苦労かけたと思います。この絵の証言をする時、聞いて下さる人が恐ろしさを共感してくれることでしょうか。ありがとうございました。

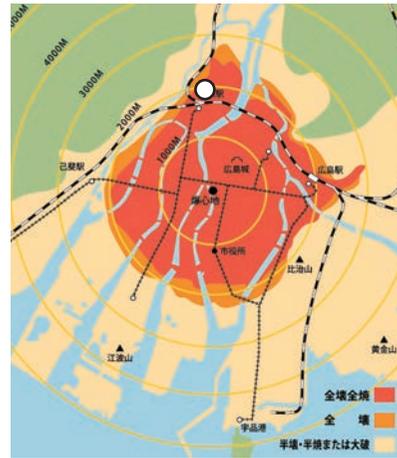


瓦礫の街

被爆体験証言者 梶本 淑子

61回生 長通 恵

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後、崩れた建物から友人とともに脱出した場面。

原爆投下直後の広島風景はがらんとしていた。

生徒のコメント

今まで原爆については漠然としか知らなかったもので、梶本さんの体験を聞いて、当時の状況を詳しく知ることが出来ました。それは、想像していたよりもっと悲惨で、ひどい状況でした。

その様子を絵にするのはとても難しかったです。描いている最中はただただ必死だったのですが、描きあげて改めて自分の絵を見ると、自分が住んでいる広島がこんなにも破壊されていて、多くの人が亡くなったのだということが現実のこととは思えず、衝撃的でした。

自分の描いた絵は、真実とはまだ程遠いかもしれないけれど、何かを感じていただければ幸いです。

被爆体験証言者のコメント

高校生として大切な勉強の合間に制作してくださって、大変だったと思います。本当にありがとうございました。全く想像もつかない時代の体験をよく理解してくださって感性の鋭い人だと感心しました。

私の思い通り、体験した通りの風景(街の色、空の色、ひとの呆然とした姿)がそのままに描かれています。そしてあの時(工場から這い出た時)の、音も風の動きも重たかった時間(とき)が絵を見て思い出されました。この通りでした。

迫力のある立派な絵に感動しました。ありがとうございました。

川

被爆体験証言者 梶本 淑子

63回生 上田 桃子

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日、逃げる途中に見た、川に流されている人と岸によじ登ろうとする人のいる光景。

生徒のコメント

見たことのない光景を描くのは難しく大変でした。どのように描けば、梶本さんが証言活動でお話される時に、聞いている方々が原爆の恐ろしさや怖さを視覚から感じとることができるのかを考えながら取り組みました。あの時、「生きたい」「助けて」と上に手を伸ばした人々が大勢いたことを多くの人に知ってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

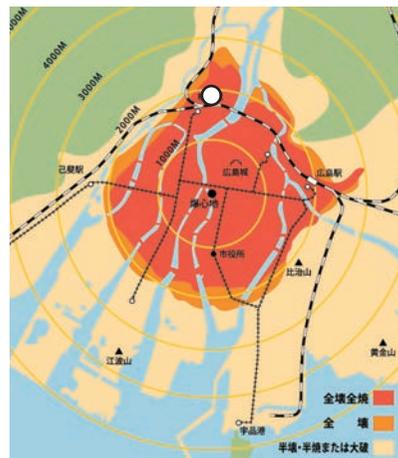
想像もつかない最悪な風景についての体験をよく聴き、理解して下さって、感性の鋭さに感心しています。川の色に苦労されたと思いますが、立派な絵ができました。ありがとうございました。

這い出てみると

被爆体験証言者 梶本 淑子

62回生 松島 有希

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

学徒動員のため工場に向かっていた梶本さんは、その工場の中で被爆された。潰れた建物から必死で這い出ると、広島は街は一瞬にして瓦礫となり、友人は手足に重傷を負い苦しんでいた。

生徒のコメント

自分と同じくらいの年齢の頃、このような体験をして本当に辛かったらうなと、描いているうちに改めて感じました。

このような体験をする人が二度と現れてはいけなくと強く感じるようになりました。

被爆体験証言者のコメント

人類最悪の状態の光景をよく理解して下さい、迫力のある立派な絵に感動です。この通りの風景でした。思い出します。ありがとうございました。

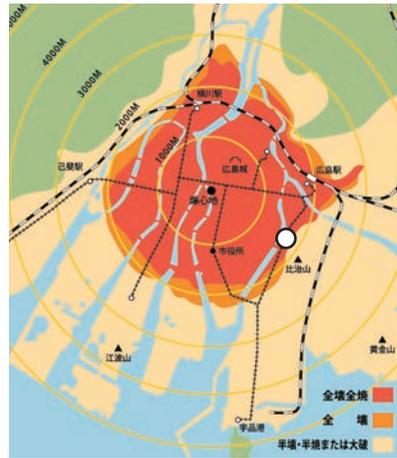


鶴見橋

被爆体験証言者 北川 建次

60回生 脇 孝子

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原子爆弾が投下されて数日後の画面を描いた。空も晴れていて川はとても澄んでいるが広島はなくなって、むなしさだけが残っている雰囲気である。鶴見橋の崩壊によって原爆の恐ろしさを表した。

生徒のコメント

北川さんのイメージに少しでも近づけるように考えながら描いていくことが大変だった。

資料も参考にしかならないなかで、自分の頭に浮かんだことを表現していくことに苦心した。

被爆体験証言者のコメント

おびたしい人々を失った、見るだに悲しい広島市街の焼け跡であり、廃墟である。母と弟の遺骨のあった、友人や先生のおびたしい遺骨のあった涙のあふれる焼け跡である。原爆の爆風と引き潮で流された鶴見橋、多くの方が亡くなった向こう岸からこちらへ逃げた。まだ、青々とした柳が焼け焦げた悲しい広島市中心部をよくこれまで感性豊かな想像力で再生してくれたと感謝の念にたえない。空の青さと山の緑は昔のままに私たちに暖かく包んでくれ、「生きよ」と力を与えてくれる気がした。絵もまた若々しく未来に向かって羽ばたいている。

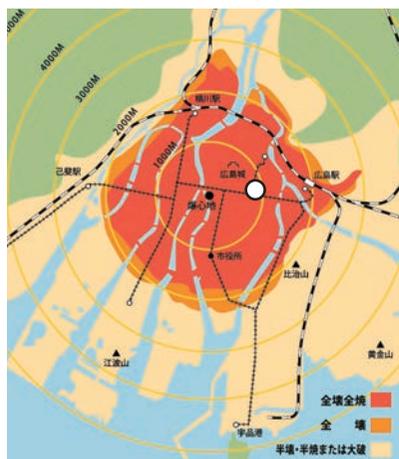


変わり果てた広島の繁華街、新天地

被爆体験証言者 北川 建次

64回生 山中 亜美

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

北川さんが竹屋小学校から自宅(現在の新天地)へ帰ろうとしたとき、火が燃えているのを見て呆然と立ち尽くしているところ。

生徒のコメント

実際に見たことのないものばかりで、多くの資料を参考にしました。特に瓦礫が散乱しているところや火を描くのは大変でした。また、火が燃えているところは明るくなり、他は暗くなっていたということ表現するのも難しかったです。

被爆者の方のお話を聞いてそれを絵にするという貴重な体験をして、改めて平和であることの大切さ、原爆の恐ろしさなどを知ることができました。また、今まで平和学習などでお話を聞いたことはありましたが、一対一でお話を聞くことができよかったです。

このような戦争が起こらないように、この世界が笑顔であふれるように、平和活動をしていきたいと思います。

被爆体験証言者のコメント

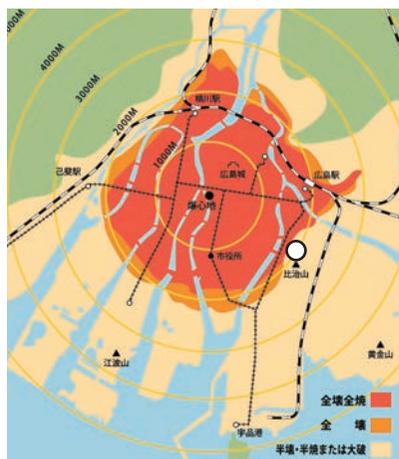
爆心から外へ外へと逃げる人と反対に、我が家はより危険な爆心地の方向にあった。行けども行けども真っ暗でおびたしいけが人ややけどの人々、壊れた家屋。我が家の方角は既に火の手に包まれ、広島一の歓楽街であった八丁堀・新天地の大きな建物が次々と炎に包まれ、火が私の方に迫ってきた。我が家はどうなったか行くすべもなかった。

被爆楠と比治山に逃げ込む人々

被爆体験証言者 北川 建次

67回生 中川 佳乃子

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後、北川さんが比治山に逃げていく時に見た光景。



生徒のコメント

先入観や主観に固執せず、北川さんの見た光景をありのままに描こうと思いましたが、戦争が生み出した恐ろしい惨状を想像して描くことは難しかったです。

被爆者の方のお話を元に絵を描いたことは、一生のうちで忘れられない貴重な体験となりました。平和とは、一体どういうことなのかを、改めて考えさせられました。

叫び、苦痛、そして怒り

被爆体験証言者 國重 昌弘

63回生 野邑 遥香

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆で火傷を負い、命からがらに帰宅した國重さんが母親に押さえつけられ、ケロイドになるのを防ぐために火傷した皮膚を父親にピンセットで剥いてもらうところ。

生徒のコメント

國重さんだけがその目で見、感じた苦痛を証言からイメージし、絵に描き起こすのにとても苦労しました。
この絵を描いて、私たちの世代が体験したことのない「戦争」というものがより具体化できたと思います。

被爆体験証言者のコメント

下絵が仕上がったのを見て、思わず顔をそむけた。私がお願いして絵にさせていただいたのに、私自身がその絵をじっと見ることができない仕上がりになっていました。あの痛さが今でもよみがえってきます。



重症者を運ぶトラック

被爆体験証言者 國重 昌弘

67回生 宇都宮 未来

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

大火傷を負いながら自宅に帰ろうと歩いていた。そこに救護トラックが一台。乗せてくれと頼んだが、「お前の火傷ほどでは乗せられない」と断られてしまった。しかし、走り出したトラックに無理矢理飛び乗った。

右のおばあさんに「ちょっと寄ってください」と言った。「イタイ、イタイ、イタイ」見ると、おばあさんのひざが割れている。

左のおじいさんに「ちょっと寄ってください」と言った。「イタイ、イタイ、イタイ」見ると、おじいさんの頭が割れている。

トラックが揺れるたび、うめく人々。私は体を小さくしてじっと耐えていた。

生徒のコメント

國重さんの記憶や感情を、一度自分を通してキャンバスに描いていくことは、大変難しく、責任が重いものだと思います。実際に経験したことのないものを想像して描いていくことは初めてで、その中で初めて原爆の恐ろしさを身近に感じることができました。

この絵を描くことで、國重さんや、その被爆体験を語り継ぐ伝承者の方々のお手伝いできれば良いと思い制作しました。この絵が戦争、原爆の愚かさ、非道さを伝えることができたら良いと思います。自分のできること、原爆を伝えてゆくことが大切なことなのだと思います。

被爆体験証言者のコメント

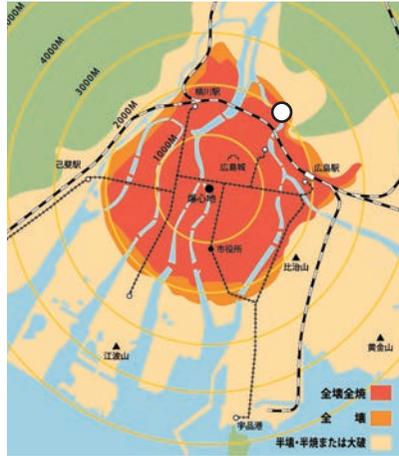
第一に、宇都宮さんに、このような楽しさのない、厳しい絵をお願いしたことを申し訳なく思っています。しかしこの絵が、何万人、何十万人の人に核兵器の厳しさ、恐ろしさを訴えることができる一助になると考えていただき、ご理解いただきたいと思います。

被爆して避難した河原での出来事

被爆体験証言者 國分 良徳

67回生 羽田 優希

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下後、避難した河原の様子。第十一連隊歩兵隊が避難してきており、東練兵場に避難しようとしていたが、橋が燃えていたため河原に来ていた。元衛生兵の父親が、持って逃げていたヤカンの水を兵隊たちに飲ませていた。対岸では神社や食料配給所が燃えていた。顔に包帯を巻いている将校は、地面に軍刀を突いて立ち上がり、当番兵がしきりに「上官殿、座ってください」と頼むのを「俺はこれでいいのだ」と聞き入れなかった。

生徒のコメント

当然のことながら、黒焦げの人間を見たことがないので、「リアル」に描くに苦労しました。トラウマの追体験という意味で、見た人が心の底から「怖い」「気持ち悪い」「もう見たくない」と思うような絵を描くことに努めました。同時に、目をそらしたくてもそれが現実であったことを知ってほしいと思います。

被爆体験証言者のコメント

被爆した寺で、即死して外に出せなかった母と妹、弟を残して避難して来た河原で、持って逃げたヤカンの水を、父と私で兵隊たちに飲ませている姿が良く画かれている。

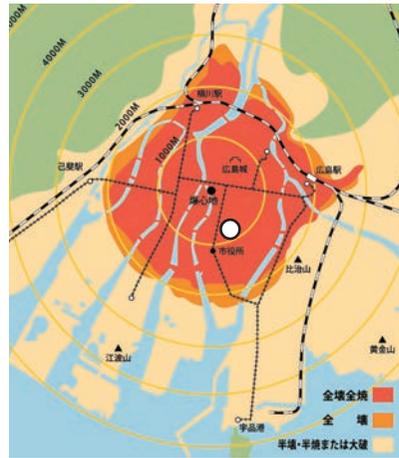


倒壊校舎からの脱出

被爆体験証言者 兒玉 光雄

64回生 花岡 美優

平成23(2011)年度制作 油彩画 (F15号)



描いた場面

倒壊校舎から脱出して、材木に挟まってしまった友人を助け出そうとしている場面。

生徒のコメント

証言者の方の中にある、記憶の中のワンシーンをできるだけ絵で表現しようと試みたのですが、見たことのない情景を、言葉だけを頼りに絵にするというのは、とても難しかったです。

被爆体験証言者の方々の高齢化に伴い、体験者の方から直接当時の様子をお話して頂けるのは、もしかすると私たちの世代で最後かもしれません。原爆について、被爆三世の私たちでさえピンとこない存在となりつつあります。そうすると、私たちの次の世代の人たちはどうになってしまうのでしょうか。平和意識の高い広島で生まれ育ち、小さい頃から平和学習などをしてきた私たちには、原爆が投下された当時のことを次の世代の人たちへ語り継いでいき、平和意識の輪を広げていく義務があると思います。その為に、今回制作した絵が少しでも役に立てたら、と思います。

被爆体験証言者のコメント

爆心から800m余りの古い木造平屋校舎内で被爆。その瞬間に直撃弾が教室に命中したのかと思い、机の下に伏せました。私は奇跡的に倒壊校舎の下から垂木や板を折って脱出しました。外は真っ暗闇。太陽はおぼろ月の様です。校舎の下では級友が腕や脚を挟まれて救助を求めています。夢中になって数人を引っ張り出しました。

やがて黒い闇のとばりが消える頃、近くのビルの窓から炎が吹き出て、遠くに見える福屋や中国新聞社も炎に包まれました。校庭のユーカリの樹は幽霊のようです。

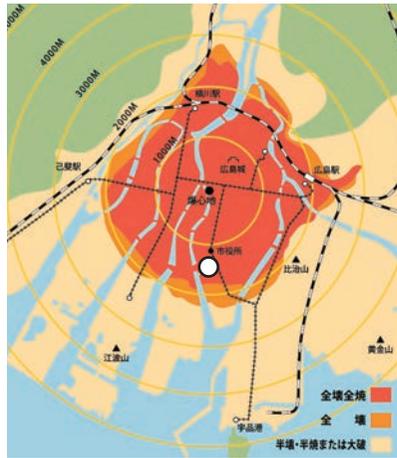
その時初めて広島市内が消えていることに気付きました。その頃の私は嘔吐を繰り返し、弱り果てていました。

人間檻樓(らんる)の群れの中に

被爆体験証言者 兒玉 光雄

68回生 津村 果奈

平成26(2014)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

私は、爆心地から800m余りの木造平屋校舎内で被爆。辛うじて倒壊校舎を脱出し、学友の救助に尽くしたが、火が回ってきたので校舎を離れ、東方に向う。しかし火のトンネルに阻まれ日赤病院前の大通りに迷い出る。御幸橋方面に続く電車通りに出ると、爆心地方面からボロ布を纏ったような悲惨な姿をした被爆者の大行列に遭遇する。日赤病院に入れず溢れた被爆者の群れは、一様に両手を前に突き出し苦痛の唸り声と、「水」「ミズ」の呻き声。その行列の中に、左目が飛び出し眼球を左掌に抱えた青年を見て寄り添って歩いた。道端には瀕死の重傷の母親が、乳飲み子を抱きしめ、夾竹桃の枝を握りしめ苦痛に耐えわが子を守ろうとしている姿を見る。傍を通る傷ついた兵隊の群れは、銃剣を杖代わりに、市民を助ける義務も忘れ逃れていく姿を見て「日本は負けた」と思った。これらの行列はやがて御幸橋西詰めにかかると、火傷の熱さに耐え切れず川に入る者、臨時救護所に駆け込むもの、そして軍隊から救護にきたトラックに乗って島に避難する者などに分散し、御幸橋を渡る被爆者は僅かになった。

生徒のコメント

初めて兒玉さんのお話を聞いた時に、目玉が飛び出た青年や、皮膚がボロ布のようになった人の話を聞いて、70年前にこの広島で本当にこのように悲惨なことが起きたのだと衝撃を受けました。この作品は、少しでも当時の現状に近づくことを目的として制作しました。そのために、今まで恐くてあまり見ることができず目を背けていた、やけどの写真資料を見て描きました。そのことで、今まで想像もしたことがなかった、怪我の痛みや表情など、その人の内面を考へてみるができ、当時の状況が身を持って感じられました。この絵が、一人でも多くの人に原爆の恐ろしさ、平和の大切さについて考えてもらうきっかけとなれば幸いです。

被爆体験証言者のコメント

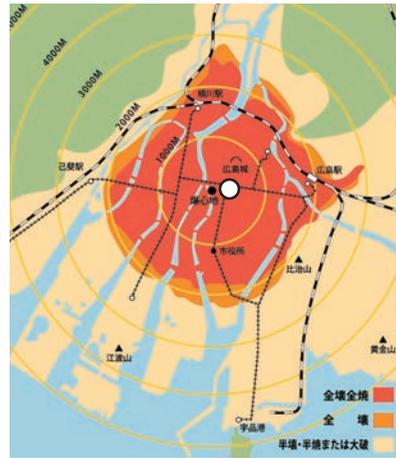
眼球が飛び出した青年の姿、ボロ布のようにたれ下がった皮膚を見て、最初は驚きながらも、次第に被爆状況を納得していく女高生を見て、被爆の状況を伝えるのは良い方法だと感じるようになった。しかし一方つらい気持ちによく耐えて真正面から取り組んでくれた姿勢に感謝しています。

静(せい)

被爆体験証言者 新宅 勝文

61回生 仲元 愛

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下の翌日の商店街の風景。

原爆の爆風や光などで暴れた馬を、馬借の人が落ち着かせるために覆いかぶさっている光景。

人の影になって馬の顔だけがきれいに残っていた。

生徒のコメント

原爆で被害にあったのは人間だけではなく、動物たちも多くの被害にあっているのだということを知りました。動物が受けた被害を描いた絵は少ないと思うので、たくさんの人に見ていただいて、命の大切さについて考えてもらいたいと思います。

この絵を描くにあたって、馬の死体や瓦礫などの資料を本や映像などの中から探し、参考にしながら描きました。特に、馬の表現に力を入れて描きました。

私はこの原爆の絵を制作したことで、改めて原爆の与えた被害を多くの人に知ってもらいたいと感じました。

被爆体験証言者のコメント

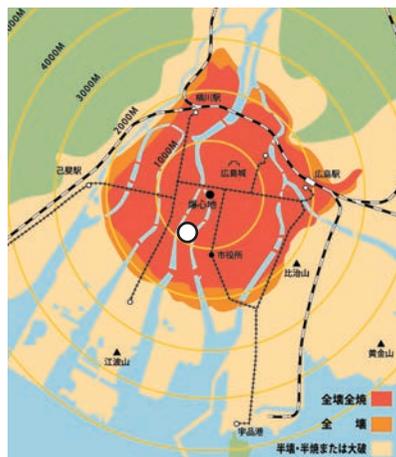
戦時中、ガソリンを使えないから荷物の運搬は馬です。爆弾を受けた馬が驚いて悲しんで泣くその状況を見て、馬車引きのおじさんが少しでも馬を安心させてやろうと思い、馬の顔に自分の体を乗せて共に死んでいく。だから馬は顔が焼かれずきれい、おじさんは焼かれて炭になっている。

死体を積んだトラック

被爆体験証言者 新宅 勝文

66回生 竹重 美里

平成24(2012)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

中島町あたりで、死体を焼却する場所に運ぶために、トラックに死体を積んでいる場面。トラック5台が死体でいっぱいになっている。一段ずつ丁寧に並べられ、くずれ落ちないようにされている。

生徒のコメント

打合せの時、新宅さんからいろいろな場面の話をお聞きました。その話の中でも一番印象に残った、死体がトラックいっぱいにも積まれている場面を描きました。

今では考えられないような光景を、できるだけその時の状況に近づけるように描いていくうちに、原爆の悲惨さを改めて感じました。

今回制作した絵が、今後の証言活動の役に立てたらと思います。

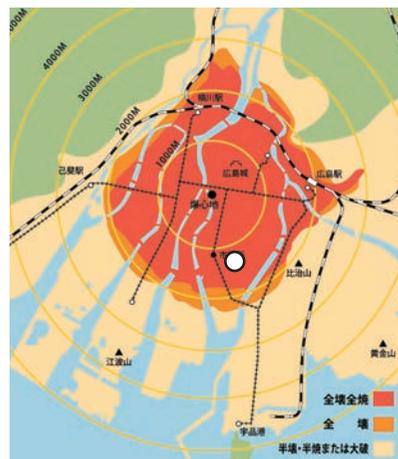


おいしかったよお…ありがとう…。

被爆体験証言者 新宅 勝文

66回生 岡本 実佳枝

平成25(2013)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

8月6日、原爆が投下されて1時間ほどがたち、千田町にあった当時の広島大学の大きなグラウンドに、全身に大やけどを負い、白くなった皮膚がずるむけになった人、爆風で飛んできたがれきに肉をえぐり取られた人、絶望に打ちひしがれて呆然とし、座ったまま動かない人…といった、四、五百人もの人が集まっていました。

再びここに戻ってきた新宅さんは、楠の下に、3歳くらいの子供がまだ息をしていることに気が付きました。その子は、全身が大やけどで白くなり、頭の皮もむけ、髪の毛も無くなっていました。新宅さんはその子に水をせがまれたので、防火用水のところに行きました。しかし、防火用水の中には水が一滴も残っておらず、仕方なくへどろに含まれていた泥水を、自分の服のすそに染み込ませ、渾身の力を振り絞ってその子に与えました。するとその子は、そのわずかさかさき一杯の泥水を飲み終えた後、「おいしかったよお…ありがとう…」と言って、安らかな表情のまま、新宅さんの腕の中で亡くなりました。

生徒のコメント

私がこの原爆の絵の制作を通して苦労したことは、全然見たことがなく、今まで想像したことのない光景を、言葉や数少ない資料だけで絵に描きおこすことでした。特に、火傷によって白くなった皮膚を描くのが難しく、何度も何度も描き直しました。

新宅さんから、あの8月6日から今年で70年の月日が経っても忘れられない辛い記憶を話していただいて、その深い心の傷を知り、胸が張り裂けそうな気持ちになりました。

同時に、私は「原爆」を知っているつもりでしたが、新宅さんのお話と、私がイメージしていた原爆とはあまりにもかけ離れており、そんな自分に腹が立ち、情けなく思いました。

私は、この原爆の絵の制作を通して、私たち一人ひとりが「原爆」に背を向けず、より深く知り、次の世代に受け継いでもらう架け橋にならなければいけない世代なのだなど、改めて実感しました。この絵がきっかけとなって、核兵器のない、平和な時代になってほしいと願っています。

大八車

被爆体験証言者 寺前 妙子

63回生 井上 茉美

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

治療のために収容されていた金輪島から、大八車に乗せられて家へ帰る場面。

生徒のコメント

原爆の絵を制作することで、戦争や原爆がいかに人々を苦しめるのか、いかに悲惨であるかということを感じました。

実際に見たことのない様子を絵にするのはとても難しく苦労しましたが、何度もお話を聞いたり資料を集めたりして、当時の様子に少しでも近づこうと努力しました。

被爆体験証言者のコメント

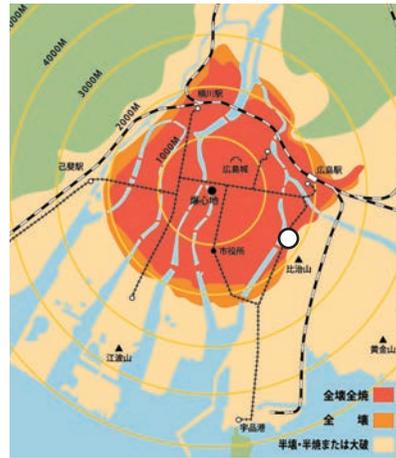
大八車をよく描いていただいたので、現代には通じない車を若い人に知っていただくために助かる絵となり、大変感謝します。

先生の支え

被爆体験証言者 寺前 妙子

62回生 楯田 みゆき

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

電話局で被爆した後、市の北の方へ逃げるため、橋が焼け落ちた京橋川を泳いで渡っているところ。生徒の中でも特に顔にひどい怪我を負っていた寺前さんの方を、担任の先生(画面中央右)が振り返って励ましている。画面は寺前さん自身の見ていた視界として描いているが、当時寺前さんは怪我や疲労のせいで目が見えなくなりかけていたので、視界が狭まっていくことを表現するために、周りを暗くした。

生徒のコメント

最初に絵の構図を決める時、寺前さんの「目が見えなくなっていく様子」を絵でどのように表現するか迷いました。また、担任の先生の写真などの資料が全く残っていなかったので苦労しました。何より、先生がこの瞬間、どのような表情をしていたのかを想像するのが大変でした。そのことも含めて、寺前さんに繰り返し質問させていただいたので、原爆について知らなかったことまで知ることができました。

広島に何が起きたのかということを知りたくておきかっていたので、原爆の絵を描かせていただいたことはとても貴重な経験になりました。今後もこうした活動を通して、戦争の事実と平和の尊さを未来に伝えていきたいです。

被爆体験証言者のコメント

私は、だんだんと気を失っていくと同時に眼も見えなくなっていました。また、意識も薄れていきました。あの時の様子を忠実に描いていただいて、この絵によって私の記憶が呼び覚まされました。

朝一緒に遊んでいた友達の姿

被爆体験証言者 寺本 貴司

60回生 西川 幸

平成19(2007)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

朝一緒に遊んでいた友達と避難先の古市のお寺で会った場面を描いた。この友達は、二、三日後に死亡したと聞いた。数分の違いで被爆状況が異なり生命の分かれ道となった。

生徒のコメント

資料集めに一番苦労した。あまりにも資料が少なく、被爆体験証言を聞いて想像したことを描きおこす時に、寺本さんと自分のイメージを近づけていくことに苦労した。

被爆体験証言者のコメント

被爆地から数キロも離れた避難先の光景、今も鮮明に甦る。数分の差で私の姿であったかもしれない当時の状況であり、逞しい想像力で再現してくれた。

ご苦労さん、ありがとう。

私が記憶する惨状を描く事の苦しさを察する。

二度三度と逢うたびに言い表せないことを想像してほしいとお願いしたが、貴方たちが想像もできないことを願い、心に傷を負わせたのではないかと心配をした。

貴方たちだから出来た追体験で、命の尊さ、平和のありがたさをより深く考え学んだことと思う。

ご健勝とますますのご成長を祈念する。

背負われて

被爆体験証言者 寺本 貴司

64回生 児玉 紗世

平成22(2010)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

原爆投下直後、寺本さん(少年)が近所に住んでいた女性に背負われて、爆風によって崩れた橋を渡って向こう岸へ向かっているところ。

生徒のコメント

原爆投下後の風景や、亡くなった方などを実際に見ることはできないので、少ない資料と自分の想像で絵を描かなければならなかったことが大変でした。この絵が証言活動のお役に立てることをうれしく思います。

被爆体験証言者のコメント

子どもの遊び場でもあった美しい川は、一瞬にして橋は崩れ、火に追われて逃げるのに困難であった。崩れ落ち、川に浮かんだ丸太の上を四つん這いで渡った。

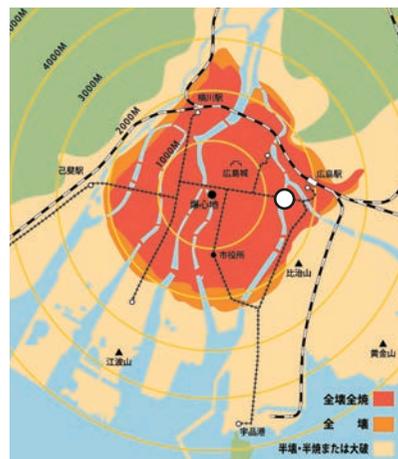
60数年経た今日、想像し難い情景を丁寧に描いていただき、将来にわたり惨状の事実が伝わることと思う。

段原の講堂にて

被爆体験証言者 長尾 ナツミ

61回生 三戸 奈津美

平成19(2007)年度制作 水彩画(F15号)



描いた場面

小学校の講堂に避難してきた人たちが、ところ狭しと並べられている様子を描いた。

生徒のコメント

見たことのないものを想像して描いていくというのは、やはり難しいものだったが、原爆の絵の制作は、当時の状況についていろいろと調べる機会となった。

また、この絵の制作を通して、証言者の方と直接会い、話をするという貴重な体験をすることができただけでなく、普段はあまり“原爆”というテーマについて話すことがない周りの人の意見なども聞くことができたことも、今回の絵の制作に取り組んだうえで、とても重要であったと思う。

被爆体験証言者のコメント

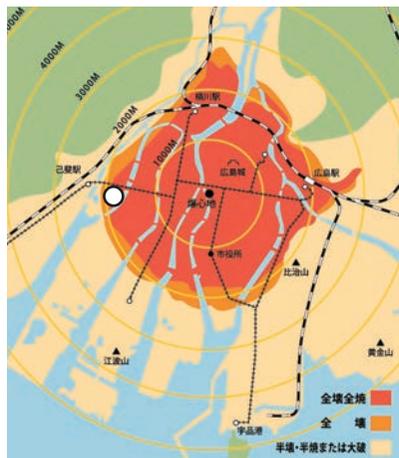
学校は臨時救護所として多くの被爆者が避難してきた。火傷を負った人やけがをした人など多くの負傷者がところ狭しと並べられていた惨状がとてもよく描けている。見たこともない光景を想像して描くということでもとても苦労したと思うが、私が思い描いていたとおりの絵の仕上がりに満足している。

力尽きた人々

被爆体験証言者 朴 南珠

69回生 杉江 湧愛

平成28(2016)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

火の手から逃げた先の福島川の河原で見た、大火傷を負った人々と、救出にきた軍人の様子。

遺体を火葬するため、木などを運んだ。足の踏み場もないほど、多くの人が倒れていた。

生徒のコメント

この度の原爆の絵の制作は昨年に引き続き二回目でしたが、原爆に対する恐怖や制作の難しさは変わらず、むしろ昨年より上回るほどでした。

しかし、朴さんは私に根気よく説明して下さい、こうして完成に至る事ができました。

この絵が少しでも朴さんの証言活動に役立てばと思います。

被爆体験証言者のコメント

50年間、あまりの惨さに、あの日のことを思い出したくなかった。

証言をするようになって、戦争が残酷で、二度と繰り返してはいけないものだと思返しした。

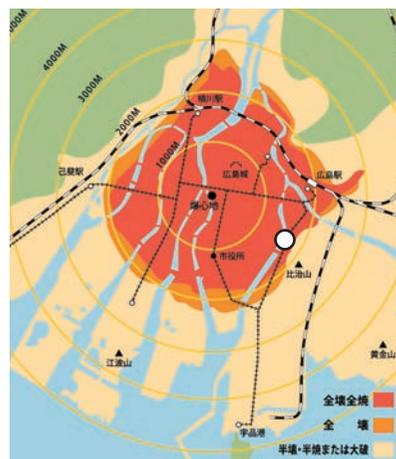
罪の無い人が犠牲になる、そんな原爆をもう使ってはいけない。

そこにある命

被爆体験証言者 松本 都美子

61回生 榎 砂千可

平成20(2008)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

被爆当日、川を流れてくる人々を橋から眺めている光景。
橋の上の人々は山に向かって避難している。

生徒のコメント

実際には見たことのない、川を流れている人の姿やケロイドの状態を想像して描くことは難しく、何度も行き詰ってしまいました。
多くの人を絵の中に描き足していく毎に、原爆がもたらした被害の大きさに衝撃を受けました。
被爆者の方が毎年亡くなっていく中、こうしたボランティアに参加した私も、一緒に平和活動をしていかなければならないと思いました。

被爆体験証言者のコメント

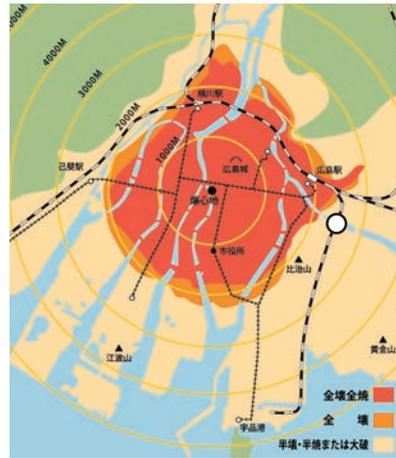
溺れながら流される人々数知れず、橋を渡るお化けのように傷つき、死におびえながらのろのろと歩く人々のその姿は、一生、私の脳裏から離れえぬものとなる。

橋渡る時

被爆体験証言者 森田 節子

65回生 嶋田 さくら

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

東照宮にある救護テントの所へ向かう場面。川の上に架かった線路を橋代わりに渡っている。川には生きていた人や亡くなった人たちがたくさん流されていた。

生徒のコメント

実際に見たことのないものを描くことが難しかったです。できるだけ被爆者の方が覚えていらっしゃるままに描くよう努力しました。

今回、原爆の絵を描くことで、少し平和について考えることができました。この絵を見てくださった方が、平和について考えるきっかけになればと思います。

被爆体験証言者のコメント

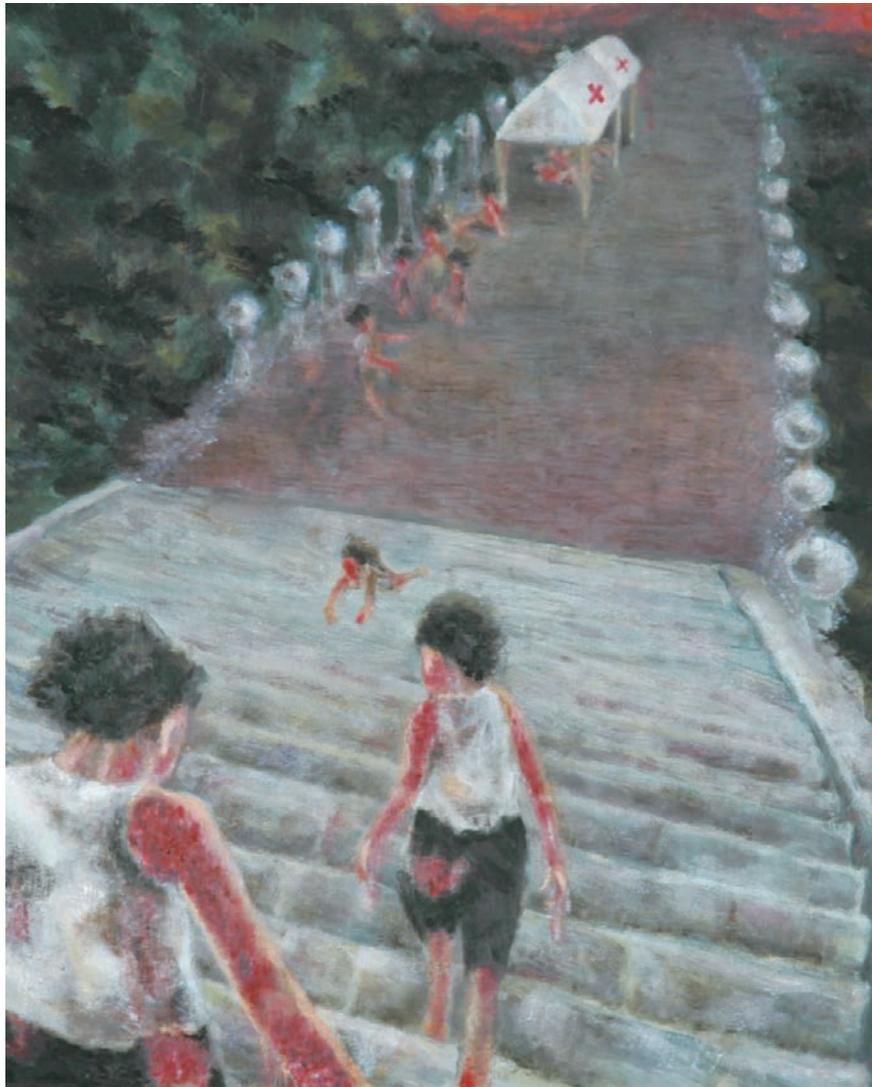
救助を求めて学校に帰ろうとしましたが、学校へ向かうためには猿候川にかかっていた軍用列車の宇品線の鉄橋を渡るしかありませんでした。鉄橋を渡る時は、川には死体らしきものが流れていました。

東照宮にて

被爆体験証言者 森田 節子

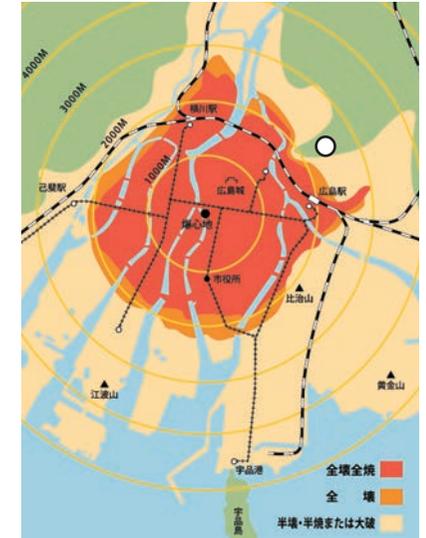
65回生 前原 詩乃

平成23(2011)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

助けを求めて東照宮から学校へ向かう場面。お互いに水筒の水をかけ合い、励まし合って進んだ。東照宮の階段を下りていくと、救護所ができていて、市内から逃れてきた人々が集まってきていた。



生徒のコメント

証言者の方のお話をもとに、少しずつ制作を進めていきました。実際に見たことのないものを描くのは大変でしたが、当時の森田さんが感じた不安や痛みを表現することに気がつけました。今回の制作を通して、平和について考えるだけでなく「伝える」お手伝いのできたのではないかと思います。

被爆体験証言者のコメント

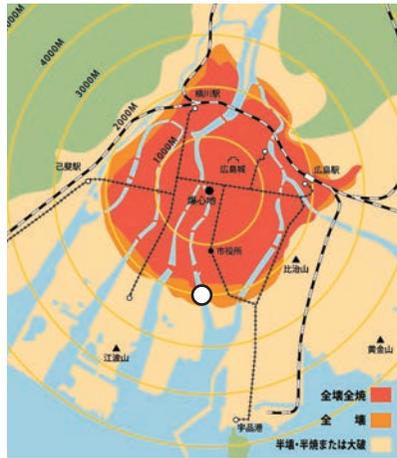
神社に避難した後、助けを求めて階段を下りると、沢山の火傷を負った被爆者の人々が這うようにその階段を登ってきました。この人達は駅の近くから逃げてきたのでしょう。

閃光

被爆体験証言者 渡邊 美代子

62回生 粟谷 果苗

平成21(2009)年度制作 油彩画(F15号)



描いた場面

渡邊さんのお父さんが建物疎開作業に出て、土手で建物を取り壊している時に被爆した瞬間。

生徒のコメント

自分が直接体験したことはないのですが、渡邊さんから聞いた話をもとにして、想像して描いていきました。

原爆が爆発した瞬間の写真はないので、自分で撮影した写真などを参考にしながら、光や影、色なども想像しながら描いたことが一番大変でした。

被爆体験証言者のコメント

元安川の土手下で建物疎開作業をしていた父が、大火傷をして帰って来て、びっくりした。父の後ろで作業をしていた女性は、ちょうど父の陰に隠れる状態だったので火傷を免れた。

